



紙に書く嬉しさ

増田明美

私は新しいティッシュを買うと、すぐ匂いがかぐ癖がある。人前でもつい「クン、クン」と鼻を鳴らしてしまい、周りから「ン？」という顔をされることも。保育園児の頃はティッシュではなく「ちり紙」と言っていた。当時、手のひらサイズのちり紙はビニール袋に包まれていて、開いて鼻を寄せると水仙と鉛玉を混ぜたような甘い匂いがした。白くて柔らかいちり紙には、ピンクの線でアニメが描かれていて、友達のちり紙と絵を比べたり匂いをかいだりしてキヤーキヤー騒いだものだ。運動会では、みんなで薄いピンクと白のちり紙で花を作った。数枚を重ねて、蛇腹に折って真ん中を輪ゴムで留め、一枚一枚広げていくとバラの花のカタチになる。その花で入場ゲートの看板を花壇の

ように囲んで運動会を盛り上げた。

小学生になると、墨汁とお線香の匂い。毎週日曜日にお寺に習字を習いに行っていた。お寺は家から二キロメートルほど離れた所にあり、保育園児の弟と二人で里山を越え、トンネルを越え、田んぼの畦道を歩いて通った。先生はお寺(中瀧寺)の住職の牧野さん。いつもニコニコしている子ども好きな人だった。牧野さんが朝のお経を終えて一休みしている頃、私と弟はお寺に到着。「今日も一番のりはアケちゃん、ミツちゃん仲よし姉弟」と牧野さんは童謡を歌うように迎えてくれた。私は家の畑で採れたきゅうりや柿をリュックに入れて持って行くこともあった。

お堂の隣の小屋に入ると、畳の部屋に二人掛けの机が二列に五つほど並び、いつも一番前に弟と一緒に座った。そのうち二人と次々に到着。みんな揃うと、フェルトの下敷き、筆、文鎮、硯、墨、墨汁を靴から出して机の上に並べる。墨を磨ってから、最後に半紙を広げて準備が完了。半紙を手のひらですーっと伸ばす瞬間が好きだった。それはなめらかで優しく、「いい字を書いてね」と励ましてくれているようだった。

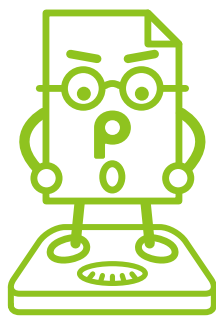


ますだ・あけみ ●スポーツジャーナリスト。千葉県生まれ。成田高校在学中に陸上長距離種目で次々に日本記録を樹立。1982年に女子マラソン日本最高記録を作る。84年ロス五輪マラソン代表。92年に引退。日本最高記録12回、世界最高記録2回更新。現在は執筆、マラソン中継の解説のほか大阪芸術大学教授など多方面で活動中。

法衣姿の牧野さんが前に立って、半紙を胸の位置に両手で持ち、その日のお手本を示してくれる。十数人の仲間たちとそれを見ながら書き始める。「笛を吹く」と書いたことを覚えている。満足のいく出来栄で、早く牧野さんに見せたいのに半紙はまだ乾いていない。光っている墨を「ふー、ふー」と吹いたら、字からツーツと黒い直線が伸びて、ヒゲが出来てしまった。がっかり。

上手に書けると「よし、うまい！花丸だ」と言って、牧野さんはダリアのような大きな花を朱墨汁で書いてくれた。また「ここは、こう。このハネはこうやって」と言いながら、文字の上に添削が入ることも。蝉の鳴き声や虫の音を聞きながら、半紙に向き合った時間が懐かしい。今、取材で小ネタを集めるために、大学ノートと筆ペンは常に持ち歩いている。新しいノートを開く時、たまに半紙を伸ばした時の感覚を思い出す。添削が入ることはなくなり、花丸をもらえることもない。でも選手の人としての匂いを伝えるために、書き続けたい。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

新聞紙だって、 ダイエットしている。

ひと昔前、1㎡当たり52gだった重さは、今や43gが主流に。新聞紙はこの30年間でなんと約2割も減量しているんです。これが人だったら…と考えると、大変さがわかりますよね。新聞紙の減量は、資源の節約や輸送費の削減、印刷のスピードアップなどにもつながっているんだって。

<http://kamitsubu.com/>

今回は12月1日号、西川美和さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Wataru Sato